

アルコールと男らしさ

関井友子

Alcohol and Masculinity

SEKII Tomoko

本稿は、アルコール依存症をジェンダーの観点から考察し、その特徴を捉えることを目的とするものである。アルコール依存症者の約9割は男性である。従来のアルコール依存の分析枠組は無自覚に男性を前提にするか、あるいはジェンダー要素を全く考慮せずにあたかも中性的な人間像を前提にしていたといえるだろう。これは、ひとりアルコール依存研究に限らず、近代以降の知の枠組全般に共通する弱点といえよう。アルコール依存研究でジェンダーの観点から考察されるのは主に女性依存症者であって、それは男性の症状や回復のプロセスとの相違や特殊性を強調するものであった。また、筆者がアルコール依存関連の学会で研究発表を行った際に、医者である男性研究者から次のようなコメントを得た。「はたして男らしさとアルコール依存にどの程度関連があるのだろうか。自分たちが男性という性を意識するのは、例えば妻との関係においてくらいであって、普段日常的に意識することではない。」この発言はそれまでのアルコール依存研究がいかにもジェンダーを無視し、無自覚であったことを示すものとも言えよう。なぜならば、医者という職業に就いている者は、すでに社会的に成功している者、つまり男性に求められている規範の体現者なのである。医者という職業から得られる社会的経済的資源は同時に女性との関係においてもまた、十分に男らしい男として存在させるのである。

社会が期待する男性規範（男らしさ）には2つの側面がある。①対社会における成功など合理性や業績といった生産性に関わる側面。②対女性におけるセクシュアリティなど生殖性に関わる側面。アルコール依存男性はその状況ゆえに、失業者や無職者が多い。つまり、①対社会での成功という男性規範に対して大きな喪失感をもっている。また、男性全員が社会的に成功しているという地位を得ることはない。それ故、多くの男性は②対女性の関係で男としてのアイデンティティを維持しようとするのである。中心に存在する者は自らを定義する必要はないのである。特に近代社会以降、人間にとって自らの男としてあるいは女としてのアイデンティティは人格の中心的な要素となった。なぜなら、男は仕事などの公共的領域・女は家事育児などの私的な家内領域というように、ジェンダーによって活動領域が割り当てられ、役割の分化が我々の社会に厳然と存在しているからだ。治療者は対象者の男としての苦しみに無理解のまま接していたと言えるのではないだろうか。

1. 調査の概要

筆者らは1991年に大阪市にあるアルコール依存症治療専門の外来クリニックで調査を行った。また、その比較群として同年大学生の父親を対象とした調査も実施した（表1参照）。

アル症者とその比較群では、ジェンダーアイデンティティは対照的な結果を示した。「あなたは自分自身を男らしい男だと感じますか」に対してアル症者が「はい（男らしい男だと思う）」という回答が14.9%だったのに対して、比較群は39.5%が「はい」と回答している。また、「あなたはもっと男らしくなりたいですか」という願望をたずねたところ、アル症者の61.4%が「はい（もっと男らしくなりたい）」と回答し、逆に比較群は30.9%が「はい」と答えたのにすぎなかった。このようにアル症男性とアル症者でない比較群との調査結果から、アル症者が男としての自信を喪失し不安定な状況にあることがあきらかになったり。

以上はあくまで対象者の主観の調査結果であるが、本稿では主に対象群である大学生の父親の調査結果をもとに、さらにジェンダー分析を進めていく。

表1 調査方法概要と対象者の属性

	アルコール依存症男性	比較群（男性一般サンプル）
調査期間	1991年3月～11月	1991年11月1日～30日
調査方法	自計式質問紙法	集合留置法（一部郵送）
対象者	アルコール治療専門医院 初心者ミーティング参加者	近畿地域3大学学生の父親
回収票（率）	182（100%）	690（78.8%）
平均年齢（SD）	49.1歳（8.89）	49.3歳（4.09）
学歴（%）	中卒 高卒 大卒	18.8 54.5（N=677） 26.7
婚姻（%）	既婚 離死別 独身	98.4 1.6（N=674） —
職業（%）	自営 ホワイト ブルー 無職	17.2 56.8（N=660） 21.6 4.3

2. データ分析

(1) 男性性欠如型飲酒：コンプレックスタイプ

男性の主観的ジェンダーアイデンティティは標準化されたジェンダー尺度での男性性と相関関係があるのだろうか。ここではPAQ（The Personal Attribute Questionnaire）を用いて、対象者の人格レベルでの個別の男性性を測定した。表2は自己認知と自己願望における回答別の男性性得点

表2 自己評価別男性性 (PAQ M) 得点

		男性性得点 (SD)	F値
自己認知	十分男らしい	20.28 (4.17)	49.53***
	男らしくない	15.75 (3.84)	
	考えたことない	18.35 (3.64)	
自己願望	もっと男らしくなりたい	18.30 (4.27)	6.20*
	もっと男らしくなりたくない	19.71 (4.10)	
	どちらともいえない	18.53 (4.05)	

* p<0.05, ** p<0.01, *** p<0.001

状況を示している。「あなたは自分自身を男らしい男だと感じますか」という自己認知への質問に対して「はい (男らしい男だと思う)」と回答した人の男性性得点が最も高く、次いで「考えたことがない」、「いいえ (男らしくないと思う)」という回答者の得点が最も低かった。さらに「あなたはもっと男らしくなりたいですか」という自己願望への質問に対して「はい (もっと男らしくなりたい)」と回答した人の男性性得点が最も低く、次いで「どちらともいえない」、「いいえ (もっと男らしくなりたくない)」と回答した人の男性性得点が最も高かった。この結果は、自らを「男らしくない」と認識している者は男性性が低く、自己の男性性が乏しいがゆえに「もっと男らしくなりたい」と願望していることを示している。つまり、対象者の自己評価は客観的なジェンダー評価と相関関係が認められたことになる。

それでは、自分が男らしい男かどうかという自己評価や、もっと男らしくなりたいという願望といった、ジェンダー意識はストレスとは無関係なのだろうか。表3は自己認知・自己願望別のストレス度を示したものである。分析では自己認知を「はい (男らしい)」「いいえ (男らしくない)」の回答者のみをストレスの高い群と低い群別に集計し、検定を行った。自己願望も同様に「はい (もっと男らしくなりたい)」「いいえ (もっと男らしくなりたくない)」と回答した者のみの分析である。ストレス尺度はGHQ (The General Health Questionnaire) の日本語版一般健康調査30項目短縮版を用いた。自己認知と自己願望とストレスはともに有意な関係をみせた。男らしくない者のストレス得点の高い群は、男らしい者で高ストレス得点群の約2.5倍の割合であった。同様にもっと男らしくなりたい者の高ストレス群は、もっと男らしくなりたくない者の2倍近くの割合だった。つまり、自らを男らしくないと認知し、もっと男らしくなりたいと願望している者ほどストレスが高いという結果となった。自己認知と自己願望の回答パターンを組み合わせることができる4類型別のストレス度は、「願望型 (男らしくない+もっと男らしくなりたい)」のストレス得点が最も高く9.78点、次いで「拒否型 (男らしくない+男らしくなりたくない)」が8.27点、

表3 自己認知・自己願望別ストレス得点

	GHQ (ストレス) 得点 (%)		χ^2 値
	低い群	高い群	
男らしい	75.2	24.8	39.70***
男らしくない	37.8	62.2	
もっと男らしくなりたい	57.7	42.3	15.50**
もっと男らしくなりたくない	77.7	22.3	

表4 自己認知・自己願望別男らしさ規範得点

	アル症 (SD)	F値	一般 (SD)	F値
男らしい	35.54 (8.82)	0.49	36.15 (6.33)	4.47*
男らしくない	36.46 (5.80)		34.53 (6.17)	
もっと男らしくなりたい	37.18 (5.80)	5.26*	38.89 (6.24)	24.94***
もっと男らしくなりたくない	33.29 (6.71)		33.35 (7.42)	

「過剰適応型 (男らしい+もっと男らしくなりたい)」が5.62点、最もストレス度が低かったのが「適応型 (男らしい+男らしくなりたくない)」の4.19点であった。ここでも、男らしさを願望するタイプのストレスが高いという結果が得られた。

次に自己認知・自己願望と男らしさ規範との関係をみてみよう (表4)。もっと男らしくなりたいと願望している者が男らしさ規範得点が有意に高かった。よって、男らしさを願望している者は男らしさ規範を強く内面化しているといえる。

男性にとって一番手軽で頻りに採用されるストレス解消法は飲酒であることは、多くの調査で検証されているが、ここでは飲酒とストレスの関係を捉えたい。表5は飲酒理由別のストレス得点と男らしさ規範得点状況を示している。飲酒理由は「すぐ眠りに入るため」から「性的高揚が得られるため」までの各項目にそれぞれあてはまるか否かで聞いた。結果として「疲れを忘れるため」「仕事や人間関係からのストレス解消のため」「職場の人間関係 (同僚・部下・上司等) を円滑にするため」「なんとなく (飲まないものたりない)」という理由で飲酒する者のストレスが有意に高かった。つまり、何らかのストレスをもつ者はその対処法としてアルコールを利用していることが確認された。

同じく表5で「疲れを忘れるため」「仕事や人間関係からのストレス解消のため」を理由に飲酒している者の男らしさ規範得点が有意に高かった。

以上の結果から考察すると、男らしくないという自己認知は男らしさ願望を強め、男らしさ規範と乖離を生じさせストレスとなっている。ストレス解消のための飲酒は、男らしさ規範の内面化つまり男らしさ願望が強い者に多くみられる。このようなタイプを「コンプレックスタイプ」と命名したい。自らの男性性の欠如が男らしさ規範とのギャップを生じさせ、それがストレスとなり飲酒に結びつくパターンである。さらに、アルコール依存による障害が失業や離婚、性的不能など男性役割の遂行を不可能にするパターンも考えられる。「男性性欠如型飲酒つまりコンプレックスタイプ」には前者「性格コンプレックスタイプ」と後者「アルコール障害コンプレックスタイプ」が含まれる。

(2) 男性性シンボル飲酒：シンボルタイプ

調査データの分析を進めていくと、さらに興味深い結果が得られた。酒と男性の親和性は一般的にいわれていることである。この関係性をデータが裏付けた。表5の男らしさ規範と飲酒理由の関係で、「男らしさ規範」を内面化している者は「仕事上の接待や営業のため」や「職場の人間関係を円滑にするため」の飲酒が多いという結果がえられた。また、「仲間や友人と楽しく過ごすため」や「性的高揚が得られるため」に飲酒する者の「男らしさ規範」得点が高かった。前者は主に対社会での公共的領域での男性役割と飲酒の関係性を示すものであるし、後者は私的な領域での友人関係やセクシュアリティと飲酒の結びつきを示している。男らしさ規範を内面化し、

表5 飲酒理由別ストレス及び男らしさ規範得点

飲酒理由		GHQ得点 (%)		χ^2 値	男らしさ規範 得点 (SD)	F値
		低い群	高い群			
すぐ眠りに入るため	該当群	66.3	33.8	2.25	35.33 (6.21)	0.06
	非該当群	72.5	27.5			
疲れを忘れるため	該当群	65.3	34.7	7.20*	35.53 (6.33)	7.35**
	非該当群	76.3	23.7			
仕事や人間関係からのストレス 解消のため	該当群	61.6	38.4	12.66**	35.59 (6.64)	5.16*
	非該当群	76.0	24.0			
仕事上の接待や営業のため	該当群	67.3	32.7	0.92	35.96 (6.68)	9.10**
	非該当群	71.6	28.4			
職場の人間関係を円滑に するため	該当群	64.4	35.6	7.70*	35.74 (6.70)	9.15**
	非該当群	75.5	24.5			
家庭での会話や雰囲気 を楽しくするため	該当群	70.4	29.6	0.02	34.79 (6.59)	0.05
	非該当群	69.4	30.6			
お酒の味そのものを楽しむため	該当群	72.9	27.1	3.20	35.19 (6.33)	2.19
	非該当群	65.3	34.7			
仲間や友人と楽しく過ごすため	該当群	68.6	31.4	0.97	35.28 (6.60)	5.10*
	非該当群	73.3	26.7			
異性と楽しい雰囲気 で過ごすため	該当群	69.5	30.5	0.00	35.67 (7.32)	1.82
	非該当群	69.9	30.3			
晩酌で	該当群	70.6	29.4	0.20	35.01 (6.39)	0.82
	非該当群	68.0	32.0			
なんとなく	該当群	66.0	34.0	4.92*	35.25 (6.40)	2.30
	非該当群	75.2	24.8			
性的高揚が得られるため	該当群	64.3	35.7	0.21	38.22 (5.92)	7.39**
	非該当群	70.2	29.8			

仕事のためあるいは友人や女性とのコミュニケーションを円滑にするための飲酒パターンを「男性シンボルタイプつまりシンボルタイプ」と捉えよう。しかし、先に考察したように、男らしさ規範を強く内面化する者は、疲れやストレス解消に酒を利用する傾向がみられた。男としてのジェンダーアイデンティティが安定している者は、男性性のシンボルとしての飲酒行動を取る傾向にあるが、それはストレスと無関係ではなく、むしろ男らしさ願望がストレスと結びつき、ストレス解消にアルコールを利用するという循環を生じさせる。シンボルタイプがアルコール依存症のアルコール障害コンプレックスタイプに陥る危険性を示唆する結果と解釈できる。

(3) 男らしさ抑圧仮説

アルコール依存症男性はジェンダー的な特徴があるのではないかと仮説から始められた調査であったが、分析を進める程に、男性のジェンダー特性が飲酒やストレスと関連し、また新たな仮説へと結びついていった。自らの男性性が乏しく、社会が画一的に求める男らしさ規範とに

乖離を生じさせ、それがストレスとなってアルコール依存症に陥る。アルコール依存症者はこのタイプの男性に多いと言える。ストレスはアルコールの乱用という現象を引き起こすだけでなく、薬物乱用や犯罪、疾病、自殺、暴力、強姦、買春、幼児ポルノなど様々な病理現象として発現している。これを「男らしさ抑圧仮説」と命名する。「男らしさ規範」は現代社会で人間にとって必要とされ、一般的に求められる行動様式への指針であるがゆえに、そこからの逸脱は許されないものになっている。しかし、先の知見でも示されていたが、男らしさ規範は理想的な行動指針ゆえに実現に困難を伴う、その追究自体が緊張や不安といったストレスを生じさせるものであった。これは男性に特有な現象だと言える。なぜなら女性に求められる規範は「二流の市民」としてのもので、男性規範とは異なるものだからだ。さらにこのような二流の市民としての扱いに意義を唱えたフェミニズム運動が、女性規範そのものを柔軟で流動的なものへと変化させていった。男らしさという男性規範は人間にとって理想的な故にその逸脱が許されないジレンマとなっている。

また、パーソナリティレベルで男性性を豊かに持ち、男らしさ規範とにそれほど乖離がない場合でも、男らしさの追求それ自体が困難を伴うものであるため、ストレスと常に向き合っていないければならない。それが過度の飲酒に結びつきアルコール依存症へ陥る危険性を伴う。アルコール障害は男性役割遂行を不可能にするので、男としてのジェンダーアイデンティティは不安定になる。

男性性の豊かな者も乏しい者も、アルコール依存症に陥る危険性をはらんでいる。しかもこの結びつきは「男らしくない男」への循環構造となっている。性格コンプレックスとアルコール障害コンプレックスとの循環、この循環構造から脱出する方法はかつて女性たちが実践していったように、社会が求める男らしさ規範の内容そのものを変化させていくことである。その実践が自助集団特にAAの「12のステップ」に示されている。

3. ジェンダーの観点からみた自助集団 (selfe-help group)

AA (Alcoholics Anonymous) は1935年にアメリカ合衆国オハイオ州で二人のアルコホリックのビルとボブによって始められた。AAの活動で柱となっているのが、ミーティングである。これは各地の会場で週に1回から数回行われている。ミーティングでは約1時間半から2時間ほどで、参加者がその時のテーマに沿って自分の意見や体験を順に述べていく。議論したり反論するといったことはせず「言いつばなしの聞きつばなし」が原則である。ただそれだけの繰り返しだが、それまでどんな治療でも酒を止められなかった状況から、酒を止め続けることのできる者がでてきたのだった。アルコール依存症は自助集団のなかでしか回復できないといわれている。さらに自助集団が注目されているのは、アルコール依存症だけではなくアデクション (嗜癖) といわれる摂食障害 (拒食症や過食症) や薬物依存、ギャンブルや買い物依存などへの対処に有効だからである。さらに自助集団はアデクションだけではなく、様々な機能と目的をもった集団へと展開している³⁾。

ではなぜAAでアルコール依存症が回復するのか。その鍵が「12のステップ」にある。これはアルコール依存症者が嗜癖から回復する一連の過程を示したものである⁴⁾。まず、「1、われわれはアルコールに対して無力であり、生きていくことがどうにもならなくなったことを認めた。」自分が飲酒をコントロールできないことを認め、自分が無力であることを認めることから始まる。

これはアルコール依存症が否認の病と言われるほど、自らを依存症だと認めず、多少酒量が多めだくらいの認識で、飲み方をコントロールできると思いこんでいる。男性にとってコントロール、支配はまさに男性に求められる権力であり、男性規範の中心となる要素である。性格コンプレックスタイプの男性は権力の獲得という規範を追い求めている状況にあった。無力を認めることは、男らしさへの追求から降りることの宣言だといえる。

「2、われわれは自分より偉大な力が、われわれを正気に戻してくれると信じるようになった。3、われわれの意志と生命の方向を変え、自分で理解している神、ハイヤー・パワーの配慮のもとに置く決心をした。」これは、酒に対して無力であることを認めた自分が、自分の能力をはるかに超えた「神、ハイヤー・パワー」に身をゆだねることが必要だと思うことである。ここでの「神」は宗教的な意味ではなく、自己のコントロールが及ばぬ存在を認めることとして捉えられる。また、男性規範の一つにリーダーシップを発揮することがあげられるが、指導者という組織上の地位を追い求めることを放棄するという誓いとして理解できる。

「4、探し求め、恐れることなく、生きてきたことの棚卸表をつくった。5、神に対し、自分自身に対し、いま一人の人間に対し、自分の誤りの正確な本質を認めた。」次は、問題は酒だけではなくむしろ生き方であったことに気づくステップである。酒の力を借りた自分自身の生き方こそ変えなければならぬものである。そのためには、それまでの自分の半生を振り返り、生き方を洗いざらい点検する作業が「棚卸し」である。自分の欠点やコンプレックスをさらけだし認める作業だとも言える。根強い男性規範の一つに「男は弱音をはいてはいけない」あるいは「他人に弱点をみせてはならない」という「男の美学」があるが、自分のコンプレックスをさらけだし、弱音をはける場所を持っている人はどのくらいいるだろうか。弱音をはかせない男らしさは男性をがんにがらめにしていく鎧のようなものであろう。

「6、これらの性格上の欠点をすべて取り除くことを神にゆだねる心の準備が、完全にできた。7、自分の欠点を変えて下さい、と謙虚に神に求めた。」ではステップ4・5で見つめられた自分の欠点をハイヤー・パワーに明らかにして、その克服をハイヤー・パワーの手にゆだねるステップだといえる。男らしさを追い求め肥大化した自己を見つめ直し、等身大の自分を認知し、自己や他人をコントロールし支配することを放棄するというプロセスだともいえる。

「8、われわれが傷つけたすべての人の表を作り、そのすべての人たちに埋め合わせをする気持ちになった。9、その人たち、または他の人々を傷つけない限り、機会あるたびに直接埋め合わせをした。」自分の生き方の誤りが単に自分だけの問題だったのではなく、他人を巻き込み傷つけていたことを示している。それが過去のこととしてかたづけられるのではなく、今からでも埋め合わせをするべきであること、それほどまでに与えた傷が深いことを示している。周りの人への思いやりや気配り、いたわりは、強いて男性に求められる規範ではない。ここでは、従来の男性規範を乗り越えて進む道筋が示されている。

「10、自分の生き方の棚卸しを実行し続け、誤った時は直ちに認めた。11、自分で理解している神との意識的触れ合いを深めるために、神の意志を知り、それだけを行っていく力を、祈りと瞑想によって求めた。」これらは、これまでのステップの統合と再確認をしていると解釈されている。神あるいはハイヤー・パワーとの関係を祈りと瞑想という儀礼（行為）を通じて、よりいっそう深められると示されている。

「12、これらのステップを経た結果、霊的に目覚め、この話をアルコール中毒者に伝え、また自分のあらゆることに、この原理を実践するように努力した。」これらのステップを経験するこ

とで自分に起こった変化が「霊的な目覚め」であり、この経験を他のアルコホリックに伝えることを強調している。これがAAの活動のもう一つの柱である、まだ苦しんでいるアルコホリックにメッセージを運ぶことである。競争という男性と親和性の高い行為は、自分が成功するには他者が失敗しなければならないという点が本質である。他のアルコホリックに霊的な目覚めを伝えるという献身性は、女性とは異なり男性にとって期待されることはそう多くなかっただろう。他者への献身とAAという集団への献身が「伝える」行為となる。これもまた、従来の男性規範とは異なった行為だと解釈できる。さらに他者に「伝える」ことが、自分自身の理解や学習の程度を再確認する機会にもなり、結果として自分自身を確認し見つめ直す契機を与えることになる。ひとを助けることが自分を助ける効果となっているともいえる。

また、アルコホリック・アノニマスのアノニマスは匿名性を意味している。この原則は「金銭や所有権や名声の問題が、われわれを大事な目的からそれさせる恐れがあるからである。」「無名であることは、われわれの伝統全体の霊的（精神的）基礎である。」と記されている。男性にとって最も手に入りたい成功、それを追い求めることでストレスが高じアルコール依存へと逆戻りする危険性を端的に示している。

4. おわりに

代表的なアルコール依存症者の自助集団であるAAの「12のステップ」をジェンダー的に解釈してきた。しかし、この解釈はアルコール依存症男性にとどまらず、われわれの生きている近代社会そのものの解釈だと言っても過言でない。なぜならば、封建的な前近代社会から解放された人間の肉実が男性だったからであり、男性に求められる規範、男性規範は近代社会の基本的な原理となっているからである。科学技術の発展は、自然を人間によって支配していく歴史であった。さらに自分や周囲をコントロールし支配すること、未来まで身の丈を越えてコントロールすることが、個人に求められ、ましてや世界の経済や社会を混乱させるほどの巨大なビジネスチャンスにもなっている。コントロールし得ないものをコントロールしようという肥大化した願望の病理こそがアディクションという「病い」だとすれば、それは近代社会の規範によって必然的に生み出されるものである。アディクションは近代社会を映す鏡であるともいえる。であるならば、閉塞状況にある近代社会が次にめざす原理へのヒントがこの「12のステップ」に示されているのではないだろうか。

ジェンダーの視点は、さらに別の問題点を明らかにする。それはアルコール依存症をはじめ他のアディクションで苦しむ女性に「12のステップ」をそのまま適応できないということである⁹⁾。近代社会で解放され、肥大化した自我をもつに至ったのは男性であって、女性ではない。女性は常に男性にコントロールされ支配される対象であった。男性規範の「②対女性に関する側面」が多くの男性のジェンダーアイデンティティを支えている¹⁰⁾。また「共依存」という関係性は、自らの人生をコントロールし得ない故に、ダメな男を支配する女性のアディクションだともいえる。女性の回復は男性のそれとは異なる、と自助集団やアディクションに関わる関係者から経験的に言われている。その道筋は、男性が「無力」を認めることから回復が始まるのに対して、女性は自らの人生をコントロールする力を認めることが重要であるということだ。12のステップで考察した「身をゆだねる」「謙虚」「弱音」「思いやり」「献身性」等の概念は女性と親和的であるが、女性にとって必要なのは自尊感情という近代的な自我の確立であり、自らの人生を切り開いてい

く自立した自己イメージの獲得だといえる。

近代社会はジェンダーによって生活領域を分離しそれぞれに役割を与えた。それ故に「病い」やその回復の過程さえも異なるものとなったのだろう。自助集団の活動もジェンダーの視点がより一層必要となるのだろう。

注

- (1) 関井友子「アルコール依存と夫婦関係」岡堂哲雄編 現代のエスプリ別冊『つれあいの心理と幸福』至文堂 1994
- (2) 「男らしさ規範」とは次の8項目で測定した。「男は妻子を養わなければならない」「男は一度決めたら最後までやり通さなければならない」「男は指導力がなければならない」「男は仕事第一でなくてはならない」「男はむやみに他人の助けを求めてはならない」「男は頭がよくなくてはならない」「男はつらくても泣いてはならない」「沢山の女と寝ることは男の甲斐性だ」この8項目のうち最後の項目以外はアル症者・対象群共に半数以上の賛同を示した。詳しくは前載書参照。
- (3) 平野かよ子『セルフ・ヘルプグループによる回復』川島書店 1995
- (4) 野口祐二『アルコールリズムの社会学』日本評論社 1996
- (5) クラウディア・ペブコ編 斉藤学訳『フェミニズムとアディクション』日本評論社 1997
- (6) アルコール依存症者のジェンダーアイデンティティは婚姻状況によって異なる。男らしいと自己認知している者の割合が最も高いのは既婚者で45.5%、次いで独身者が21.4%、離婚・死別者は0%となった。同じく対象群の一般男性のジェンダーアイデンティティは妻の就業状況によって異なった。妻が専業主婦の男性の男らしいという自己認知率が最も高く88.9%、次いで妻が自営業の男性が72.2%、常勤職の妻をもつ者が66.2%、最も低かったのがパートタイム就労の妻をもつ者の63.8%だった。アルコール依存症男性・一般男性ともに、年齢・学歴・職業・収入といった属性項目は彼らのジェンダーアイデンティティとほとんど相関を示さなかった。唯一関係を示したのが上記の妻との関係項目だった。詳しくは前掲書関井(1994)参照。